

山内昌之

ジョン・ル・カレは、名作『寒い国から帰ってきたスパイ』を書いた英國のスパイ小説家である。彼は、英國秘密情報部（M I 6）に属しながらソ連の二重スパイだったキム・フィルビーについて、「心と体を、行つたこともない国、深く学んだわけでもないイデオロギー、長い恐怖の肅清で他国の誰も関わるのが危険な体制に捧げた」と痛罵を放つた。

手嶋龍一氏の『ウルトラ・ダラ』でも、さながらケンブリッジ大学卒業のフィルビーを思われる日本人外交官が登場する。この瀧澤勲は、虚構ながら、外務省アジア大洋州局長まで上りつめた人物である。史実に擬えると、M I 6のフィルビーよりも英国外務省アメリカ局長だったドナルド・マクリーンに近いかもしれない。しかし瀧澤は、サウジアラビアの建国に関わった父を持つフィルビーや、自由党党首の子マクリーンと違う点が一つある。それは、瀧澤の母が中国吉林省延辺朝鮮族自治州の出身で「数奇な運命の糸に導かれて日本にやってき」たことだ。国家公務員・瀧澤の秘め

たアイデンティティの核は、日本国への帰属意識でなく、どうやら北朝鮮への忠誠心にあるらしい。

英國の上流社会に育つたフィルビーやマクリーンの共産主義イデオロギーへの傾倒とは異なり、瀧澤には血と愛情の双方で実母のいう「過去の償い」の必要性を誰よりも理解できた。だからといって、日本の國家機密に日常接する上級公務員が北朝鮮のために国を裏切つてよいはずがない。この小説では、むしろオックスフォード大学出身のBBC特派員スティーブン・ブラッドレーの方が、M I 6の隠密エージェントながら英國だけでなく日本の利益、つまり自由主義の価値観を守るために働いている印象も受ける。日本人でなく英國人ジャーナリストを小説の主役に仕立てあげ、朝鮮人の血を引く日本の外交官を脇役に配するあたりが手嶋氏の人物配置の妙なのである。

ひとの国家観や文明論は、外交官や公務員といった職業の属性に伴う政治倫理観でなく、究極のところ個人の信念や使命感によるところが大きい。日本の大学のように愛国心や忠誠心を価値として否定する教授が多い所からは、教育のプロセスで本質的人間の成長プロセスで家庭でのしつけや教養のたしなみから涵養され、自らの人格陶冶にも負うところが大きいのではないか。

その反面、手嶋氏が造形した瀧澤や実在したフィルビーのような人間は、日本や英のよう個人にはほぼ無制限の自由、最悪の場合には自由を否定する自由さえ認めかねない国から生まれ、中国のように政治的には個人的自由が制限され、北朝鮮のように実存的な自由が少しも許されない国から育つことは稀ではないだろうか。ル・カレやキム・フィルビーを生んだ英國の文学学者サマセット・モームが、まさに秘密情報部員だったことはよく知られている。その短編集『アシェンデン』は、モームの行動範囲の広さや精細な人物描写に加えて教養と知識の深さでスペイン小説の精髓といつてもよい。しかし、モームの時代は秘密情報の取得や秘匿をめぐる個人の攻防はまだ中世的な手作りにまかされていた。サイバー空間や宇宙空間を介した機密情報の漏洩・取得・電送が行き交う非浪漫的現代においては、モームの世界すら牧歌的に感じられるほどだ。

21世紀にロマン主義やヒューマニティの香りをただよわせつつ、冷徹に情報戦争の裏を抉るには、現実の外交と安全保障の機微を皮膚感覚で瞬時に理解しながら政府やマスコミの実相をも批判的に描く筆力を必要とする。そして、手嶋龍一氏の『ウルトラ・ドラー』は、もはやスペイン小説という古典的領域を乗り越え、日本人初のインテリジェンス小説のフロンティアを切り開いた作品となっている。手嶋氏の文学的世界

は虚と実、伝説と事実、神話と歴史を絶え間なく往復しながら複雑な小説の筋を紡いでいる。それは、通常の文学修業や創作活動の延長ではまったく不可能な新しい文学ジャンルなのである。国際政治や諜報・陰謀の駆け引きの場に身を置き、相当な機密情報の取得と分析を経験した者は、文学の世界でどのくらい成功を収めているだろうか。長いことNHKの取材と報道の第一線にいた著者にして初めて、構想できるテーマは魅力に富み、誰もが飛びつきたい素材だったはずだ。

小説の発端は、京都での東洲斎写楽の絵のオーダー・ショーン、東京荒川の機械印刷所の熟練職人の失踪、マサチュー・セツツ州の製紙工場におけるドル紙幣原材料の窃盗、ローザンヌで購入された紙幣印刷機の行方などから謎めいたストーリーがおもむろに始まる。これらの小物語をすべて合わせると、互いに関係なさそうな事件のパズルがすべて埋まり、手嶋氏がメスを入れる国際犯罪の絵姿と規模が鮮やかに浮かび上がる。

小説の主題は比喩的にいえば「真贋の迷路」とでも表現すべきだろうか。さしあたり、本物と見分けがつかない精巧な一〇〇ドル紙幣が何のために作られ、その印刷がいかにして可能になつたかということだ。贋造を手助けする国はどこで、誰が日本国内で手引きをしたのか。犯罪者たちがいともたやすく日常生活を快適に過ごし、日本の行政機構や企業経営の内部で事もなげに日々振舞つてゐるのを、読む者も虚構と史

実の間をつい往復し真贋の迷路で立ち往生する羽目になる。

読者と一緒に「ウルトラ・ダラー」つまり一〇〇ドル札贋造の謎解きに挑戦するのは、BBCのブラッドレー東京特派員と、オックスフォード大学で同窓のCIAに入ったオクラホマ出身のマイケル・コリンズである。二人の会話の広がりを知ることで本書の奥行きの深さが分かるだけではない。次なるストーリーの展開を予想させる楽しみも生まれる。たとえば、ロシアに関係するエージェントの出現を「新種の蝶」と比喩し、それを説明するのに安西冬衛の近代詩「てふてふが一匹韁靼海峡を渡つて行つた」を引くことで、事件を解く重要な手がかりがサハリン（樺太）にあることがさりげなく読者に示唆される。この手法はインテリジェンス小説の文学的陰翳を豊かにする効果をもたらしている。

シベリアとサハリンを分ける韁靼（タタール）海峡とは、一八〇八年（文化五）に幕府御雇同心格の間宮林蔵が発見しシーボルトによつて間宮海峡としてヨーロッパに紹介された海域を指している。間宮林蔵は、ロシアのクルーゼンシュテルンや英國のブロートンなどがサハリンを大陸統きの半島と考え、ヨーロッパでも陸統きと信じられていた時期に、サハリンの東西両岸を踏破した。彼はアムール川（黒龍江）下流域から清朝中国支配下の地域に入り、満洲人官吏たちと対話している。そのうえで清朝が

かつてサハリン北部に入りながら放棄した事実をつきとめ、江戸幕府によるサハリン領有の根拠を得るために情報をあれこれ収集したのだ。林蔵も幕府密偵つまりシーケレット・エージェントだったのである。

このサハリンが手嶋氏の小説では脇筋でなく本筋として出てくるのは興味深い。ウルトラ・ダラーの謎を解く手がかりの一つは函館にあつた。函館には、ロシアの大学の分校や総領事館もあり、ユジノサハリンスク（豊原）との直行便も週二回飛んでいる。この便の常連は、橋浦マシネックスという企業の函館技術研究所である。この会社は、偽札を見抜く最新テクノロジーで知られており、社長の橋浦雄三はハイテク長者として著名で、実は小説冒頭の写楽の大首絵を三七四〇万円で落札した男なのだ。余談ながら、ブラッドレーは浮世絵収集家の嫡流につながり、すぐに絵を贋作と見抜いた鑑識力の持ち主もある。浮世絵の贋作と贋造紙幣とは面白い組合せである。果たして橋浦は、ハイテクの商売だけで写楽を落札できるほどの富を得ているのだろうか。この疑問は、サハリンと函館の直行便に橋浦マシネックスの社員がいつも携帯の手荷物で偽札検知器を持ち込んでいることで辻褄が合つてくる。

サハリンは江戸時代末期も21世紀の現代も、日本とロシアの人的接触や利害衝突の知られざる最前線になっている。それだけでなく、極東の一部でもあるサハリンを目

くらましに使いながら、北朝鮮が偽札で何かをたくらむとすれば、何を狙っているのだろうか。小説の頭に出てくる優秀な機械印刷職人と精巧な偽ドル札と偽札探知器のつながりがここで一つの線を結ぶ。しかし印刷機の時に、多くの犯罪疑惑が生じても、究極的目的地・北朝鮮に向かってマカオから出港した後に、中国政府は米国政府の執拗な照会に国家主権を盾に無視を決め込んだ。何故だろうか。

本書で最も魅力的な登場人物であり、多くの読者がその輪郭に共感する女性がいる。彼女の横顔を彫塑した著者の手際は見事というほかない。政府の内部から日本の国家機密が外国に漏洩しているのではないかと、危機感を抱く内閣官房副長官の高遠希恵である。上級公務員として誠実な義務感と忠誠心を抱く高遠と、素性を隠して政府に潜入した密偵もどきの瀧澤の二人については、おそらく手嶋氏が何らかの形でモデルとして思い浮かべる人物がいたのだろう。

緊迫する光景が目まぐるしく展開する本書のなかで、一服の清涼剤となるのは二人の女性の存在である。一人はブラッドレーの篠笛の師匠・槙原麻子であり、もう一人は湯島の自宅で実母のように賄いをするサキである。サキが北海道の月形から届いたキタアカリというじやがいもから作るビーフ・コロッケと江戸切子の冷やした吟醸酒の組み合わせ、瀧澤がブラッドレーを招待した松栄亭の洋風カキアゲと福神漬付のオ

ムライスなどの写実は、読者の心をひとまず落ち着かせてくれるだろう。

しかし、小説の最後に麻子を襲う思いもかけぬ事件の展開は、インテリジェンス小說ならではの結末となる。この謎解きと驚きの顛末を私が語るなら、読者の興を削ぐことも甚だしい。手嶋氏のクールな筆致による本文末尾を読めば、國際情報戦の冷戦な最前線の一端に触れる思いがすることだけは述べておきたい。

(二〇二〇年一〇月三〇日 東京大学名誉教授・歴史学者)